

発表の場ももらった。そうした中で、後藤昭雄先生、立命館大の芳村弘道先生始め、学会員の先生方に、有難い助言や励ましの言葉を受けつゝ、牛歩ながらもなんとかここまで辿りつけた観がある。心より感謝申し上げる。

そしてその私の注釈作業に最大の力になってもらったのが、この拙著の資料編(一)に収録している『菅家後集』「敍意一百韻」全注釈に取り組んだ大牟田・荒尾市民有志との漢詩講読会「道真梅の会」の会員諸氏である。詳細なことは資料編(一)の「あとがき」及び「あとがき付記」に記しているため、ここでは重複を避けるが、十年もの長きに亘り、月一回の講読会での地道な取り組みがなければこのような拙著の上梓は不可能であったと思う。十年を経て現在は この会員も四名となったが、転居され遠方になられたにも関わらず会の運営の支柱とも言える働きをして頂いている須藤修一氏を始めとする、荒川美枝子・井原和世・田中陽子諸氏の、この会に臨まれる真摯さにどれほど励まされた事か測り知れない。こうして、ご一緒させて頂いたものをこの拙著に収録できる幸を噛みしめている。

道真の太宰府時代の作品に一首一首取り組む中で、その道真の学識・詩人としての資質の神髄が見えてくるにつれ、それを我々が訓み解こうとすることが、いかに僭越で無謀なことか嫌ほど思い知らされながらも微かに見えてきた事を一言、言及して筆を置きたい。

道真は自分の作品を、その鑑賞に耐えうる人物だけには理解してもらおうと、その自分の作品には細心の注意を払い、自分の老い先が長くないことを悟っていた中での唯一の仕事が、漢詩文の編纂だったのでないかと思う。